

2025年7月20日 第二礼拝

説教題「もっと御言葉を」使徒言行録4章23～31節

主任牧師 加藤 誠

「主よ、今こそ彼らの脅しに目を留め、あなたの僕たちが、思い切って大胆に御言葉を語ることが出来るようにしてください。」(使徒言行録4:29)

生まれつき足の不自由な男を「イエスの名で癒した」ことで不当に逮捕され、牢屋にぶちこまれ、厳しい尋問を受けたペトロとヨハネが、釈放されて教会の仲間のところに戻った場面を今一緒に読みました。24節「これを聞いた人たちは心を一つにして、神に向かって言った」とあります。彼らは自分たちを取り囲む厳しい状況を互いに分かち合うだけでなく、「神に向かって言った(=祈った)」のでした。「神に祈ることの幸いを知っている初代教会」の姿がここに 있습니다。彼らは「天と地と、そのなかのすべてを造られた神さま」に向かって祈っていますが、これは主イエスが弟子たちの間で祈られた祈りそのままです(ルカ 10:21、マタイ 11:25)。いつのまにか彼らは主イエスの祈りを真似て祈る者とされている。ここに初代教会の人の強さの秘密が示されているように思います。

主イエスが何に目を注ぎ、何に耳を傾け、何に対して優しく、何に対しては厳しく向かい合っていたか。日々どんなふうに神に祈りながら行動されたか。十字架の時には信仰を粉々に砕かれた弟子たちでしたが、その彼らに聖霊が注がれる中で、主イエスのまなざしや語りかける声、立ち姿などがその心の中に生き生きと立ち上がっていったのでした。ある人の言葉や行動が、その時にはまったく理解できなかったけれども、自分自身が経験を重ねる中で心の中によみがえり、自分を支える力になっていくということがあるのではないのでしょうか。弟子たちの場合も、十字架までの場面では、主イエスの闘いがまだ他人事で、自分の闘いになっていなかった。それゆえ分からなかった。けれども自分たちが福音の当事者とされたときに、聖霊の注ぎによって主イエスの信仰と闘いが生き生きと彼らの中に立ち上がっていった。別の言い方をすると、弟子たちが主イエスをしっかりと真似て生きる者とされるために、十字架と復活、すべてを失い、すべてを受け取り直す経験が必要だったのだ…ということなのかもしれません。私たちがもし十字架の苦難に重なるような厳しい現実と直面したならば、それは私たちが主イエスをもっと深く知り、主イエスの祈りと救いの深さにもっと近づけられる大切なプロセスであると覺えたいのです。

また、この場面での弟子たちの姿は「神に祈ることの幸い」を確かに私たちに教えてくれています。先日の朝の祈祷会では第二コリントを学びました。この地上でいろいろ傷つきながら生きている私たち。しかしその私たちの呻きや叫びをしっかりと聞いてくださっている神が確かにおられて、その傷を恵みに変えてくださる幸いが語り合

われていました。ある方が言いました。J-POPで若者たちが歌う歌詞を聞いていると、みんな自分のこの叫びを誰かに聴いてほしいという思いを抱えていることが分かる。私たちのその叫びを確かに聴いてくださり、復活の希望につなげてくださる神さまが確かにおられることの幸いを聖書は私たちに告げていると。嬉しい時だけでなく、どん底の時に思いのたけを聞いてもらえる神さまがおられる幸いを覚えたいのです。

さて29節でその弟子たちが神さまに向けて祈っている言葉に驚かされます。「主よ、今こそ、彼らの脅しに目を留め、あなたの僕たちが、思い切って大胆に御言葉を語ることが出来るようにしてください」。すごい祈りだと思いませんか。もし自分ならこの状況でどう祈るだろうかと問われました。「既得權益にしがみついて、自分たちの都合の良いように事実をねじ曲げ、神の言葉を恐れようとしめないあの連中に、あなたの正しさを思い知らせてください!」とか、「彼らの理不尽な暴力から、私たちの命を守ってください!」とか、間違っている人々を正し、自分たちを守ってほしいというような祈りをするのではないかと。それに対して使徒たちは、御言葉を語ったゆえに牢屋にぶち込まれ、尋問を受けて脅されたのにも関わらず、「もっともっと御言葉を語らせてください!」と祈っているのです。神の御言葉への信頼。神の御言葉を届けてくださった主イエスへの信頼の上に、どんな時もしっかりと建つ、建てられる。ここに教会が拠って立つところの確かな礎が示されています。

今年は戦後八十年。あの愚かな戦争に突き進んだ日本の私たち、そして戦争に協力して生き延びた私たち教会の歩みを振り返り、その歴史から何を学び取り、次の世代に手渡していくのかを考える時をいただいています。1935年生まれの藤澤一清先生が遺された『にもかかわらず、教会を信じる』という本を手にししました。そこには戦時中、小学生だった藤澤先生が、父が牧師であるために「あいつの親は敵のスパイだ」と言われていじめられたこと。「非国民」というレッテルを逃れたい一心で天皇陛下を称え、兵隊さんを称えたこと。戦後その空気がガラッと変わって、アメリカから届けられる物資を目当てに教会に人々が押し寄せてきたこと。何事もなかったかのように振る舞う大人たちに疑問を覚えながらも、自分自身も戦争に協力して生き延びた身であり、その自分に果たして聖書を語る資格があるのか…と悩みながら歩んできた、ご自身の振り返りが正直に記されていて、「自分が藤澤先生と同じ立場ならどう振る舞うのだろう?」と、自分の中にある弱さを考えさせられるときとなりました。

同時にしかし、そのように主イエスから目を離して弱さの中に沈んでしまうような私たちを救い出し、嵐の海の上に立てるためにこそ、主イエスは十字架を引き受けてくださった。自分たちの弱さを知っているからこそ、「もっと御言葉を!思い切って大胆に語られようにしてください!」と神に向かってまっすぐ祈り、主なる神に依って立つ力を求めていった初代教会の信仰をいただいきたいと願います。

